【海外からの風】

マドリッドで考えたこと
――スペイン国際政治学研究所への出張報告――

大　塚　英　二

⑴　研究会の概要

本学の「大航海時代の戦国愛知」研究グループは、2014年７月15日から21日にかけて、本年度に開催されるマドリッド国際政治学研究所と共催の「日本スペイン人文学セミナー」準備のため、総勢11名のメンバーのうち６名が渡航し、同研究所において、それぞれの中間研究報告と意見交換を行ってきた。同時通訳者との事前打ち合わせに２日、研究会に１日をあてた。通訳者は当該の専門分野に詳しくないとのことで、訳語についてあらかじめ綿密なやり取りをした。

18日の研究会（写真１）では、マヌエル・バラード・ガリェゴ国際政治学研究所長と久冨木原玲本学部長の挨拶のあと、本学部の６名が報告した。以下、報告者名と題目を記す。久冨木原玲「前近代日本文学における自我の発露――笑いという視点から」、久保薗愛「ロシア資料からみる18世紀前半の日本とロシア及び大航海時代」、大塚英二「吉利支丹抄物と大航海時代の日本」、山村亜希「大航海時代の都市空間構造と港」、上川通夫「近代天皇制歴史観と前近代天皇制」、川畑博昭「『日本の君主制』・再論――法制度を「凌駕」する信仰」である。これらの中身については、今後報告書に

写真１　研究会集合写真

おいて発表されるので、ここでは直接には触れない。ただ、その表題だけを見ても、文学・言語学・歴史学・地理学・法学という多方面の分野から大航海時代にアプローチしていることはお分かりいただけよう。なお、本番のシンポジウムでは、この倍以上の報告がされる予定である。

以上の報告に対して、所長を始め、研究所副評議員であるホルヘ・デ・マヌエル・ドセ氏、同じくイグナシオ・ラモス＝パウル・デ・ラ・ラストラ氏、更には招聘予定のフランシスコ・バウティスタ氏（サマランカ大学）、パブロ・ガリェゴ・ロドリゲス氏（サン・パブロ CEU 大学）ほかより、比較文化論・比較法制史などの観点から非常に建設的な意見が寄せられた。ちょうど国王が交代した直後でもあり、スペインの現憲法下での初めての出来事を歴史の脈絡の上でどのように捉えるべきか、第二次世界大戦を挟んだ日本君主制の変化および日本国憲法下での象徴天皇制のあり方との比較研究が大きな意味を持つと考えられ、川畑報告等との切り結びが非常に注目される。

⑵　マドリッドの街並み

さて、この出張の最大の目的はセミナー開催に向けての準備報告であったが、必ずしもそれだけが目的ではなかった。特に筆者の場合、大航海時代（15世紀半ば〜17世紀半ば）のキリシタンの活動を文献学的に検討するためには、その中心勢力の拠点であるイベリア半島を直接探訪しておくことが極めて重要であった。筆者は日本近世の地域研究を本来のテーマに掲げる研究者であり、まず「地域の現場から」をモットーとしている。その面から、今回のマドリッド訪問の意味を考えよう。

宗教は観念の世界にあるのではなく、人々の日々の営みの中にある。キリスト教文化をその生活空間から具体的にのぞき見ることが筆者にとって特に重要であり、その点からマドリッドの街並みを見て感じたことを述べてみよう。現地できちんとした説明を聞くまで、この都市がメディアによって紹介されて醸し出す中世的な雰囲気は、中世からそのまま残る建物群と石畳の道路によると勘違いしていた。実は、現在のマドリッドの景観は、道路網などの基本的な骨格は大航海時代にまで遡るものの、建築物は近代、それも数十年前に統一的な

コンセプト（首都としての威容と伝統を重視し、歴史的継続性と調和性を持たせる）をもって構成されるようになったに過ぎないことを知った。いわば、日本での「重要伝統的建造物群保存地区」（通称「街並保存地区」）指定のような形で、首都景観が再構成されたということができる。

マドリッドは、もちろん観光都市としての性格もあるので、そうした利害から現状のような景観を求めたということも一面ではあるであろう（日本の京都と同じように）が、それは本質論ではない。国民が首都マドリッドに、中世より続く都市空間としての香り・匂い・雰囲気を期待したのであり、そこには政治・経済・文化等あらゆる面からの統合的構築の思想が宿っている。これこそが人々がもつ日常的な宗教性であり、筆者が最も感じ取りたかったことであるように思われた。それゆえ、筆者は、ガイドブックを頼りに、限られた時間ではあったが、マドリッドの中心部を歩き回ったのである。

言うまでもないことながら、マドリッドの中心にして最大の繁華街はプエルタ・デル・ソル周辺である（写真２）。地図を見てみると、すべての道がソルに集中している。ここが交通網の起点であり、日本でいえば東京（江戸）日本橋である。その隣接地にマヨール広場がある（写真３）。広場は王権がその威信を示す空間であり、政治的にも極めて重要である。教会や宮殿、市場などの前に空間を確保し、人々を集め、さまざまな儀式・催事を行い、コミュニティーの中心機能を持たせたのである。知識としては有していたが、目の当た

写真２　マドリッド州庁舎前

写真３　マヨール広場

りにしてみると、広場が為政者と民衆の公共的接触を保証する、準備し装飾された空間であることがストレートに伝わってくる。

ここは、現在でもかつての機能をそのまま維持し使用されている。見学した時もイベント用のステージが設営されていた。ちょうどお祭りの時期で、七月十九日の夜は聖職者を先頭に行列ができ、音楽隊の音がかまびすしく、筆者の宿（ソルからカルメン通りを北に数百メートル上がって右に折れたところで、マヨール広場からは１キロ足らずにある）のお向かいの大きな寺院までやって来ていた。観光イベントの１つでもあろうが、子どもから大人までが神妙な顔つきで儀式の中にあった（写真４）。街に暮らす住民たちの息遣いを感じた時だった。

マドリッドは暑い。夏の平均気温は31度を超える。その盛りに訪問したものだから、日中は43、４度あった。しかし、湿度が低いので日本ほどの暑さは感じない。とはいうものの、日中日差しの中を歩き回るのはかなり危険である。すぐに日陰を探して休みを取る。そんな風にして、打合せ・研究会の合間に、宿から歩いて行ける距離のプラド美術館に行った（写真５）。

ヨーロッパでも３本の指に入る収蔵品の質量に圧倒される。15世紀以来のスペイン王家の収集品の数々を、これでもかと展示している。その中でも断然多いのは宗教画および背景として宗教性を持つ作品群であった。正直食傷気味になることもあったが、じっくり見れば丸１日かかる館内を、ざっと４時間かけ

写真４　祭りの市民楽隊

写真５　プラド美術館

て回った。日本で言えば国宝か重文級のものが大半であろうが、主に時代順にそれらを並べることによって何を狙っているかと言えば、キリスト教の精神に貫かれた国家としての持続性の提示というものではないだろうか。美術的に優れたものであることは勿論であるが、そうした価値以上の重量を感じ取った。

⑶　自らのテーマに関連して

最後に、自らの報告テーマと関連して、大航海時代について考えたことを記す。日本に対してウェスタン・インパクトは２度あった。誰しもよく知っているのは明治維新にかかわる２度目のインパクトであるが、最初のものがこの大

航海時代におけるイベリアン・インパクトであった。日本の戦国時代から江戸幕府初期の時期に、イベリア半島からやってきたキリスト教宣教師を中心とした人びとは日本列島にどのような影響を与えたのか。日本社会に見る宗教世界はどのような変化を遂げたのか。そうしたことを少し考えた。

イベリアン・インパクトは、少なくとも日本近世国家のありように大きな影響を及ぼしたのは間違いなかろう。それはキリシタンを徹底的に排斥する体制・制度の形成へと向かわせ、結果として日本「国民」の宗教観を、一部を除いて決定的に世俗的で国家従属的なものに落ち着かせたからである。信長も秀吉も、言うまでもなく家康もまた、日本人為政者は神仏との同化を図ることで最終的権力者になる道を選んだ。日本人は俗的神仏にひれ伏した。しかし、キリスト者にはそれはかなわぬことである。宗教的権威が世俗的権力と棲み分けをしながら、決して敗北することなく存在し続けたのがヨーロッパである。一般には王権以上に尊敬された。そうした宗教と政治・経済が住民の日常性の中でも明確に棲み分けられ、時には切り結びながら、国民国家の形成へと展開してゆくのである。

日本列島ではどうだろう。王権を相対化する宗教的ないし聖的なものはほとんど形成されず、やがて前近代の統一的政権形成時に権力者が神格化を図ったために、それらと対抗する意味でも、極小になっていた「天皇制」が聖的な部分をフォローする形で復権せざるを得なかったのではないかと考える。

16世紀後半に日本列島で活動した宣教師と日本人の手によって作られた布教用ノートである『吉利支丹抄物』は、遠くイベリア半島を離れ、多神教とその風俗に覆われたこの列島で逞しく暮らし、自らの使命にそれこそ命を捧げる覚悟で臨んだ人びとの思いが詰まったものである。現在、このテキストを検討しているのであるが、マドリッドで見て感じた「持続的な宗教性」というものに対する理解が、当該研究には欠かせないもののように思われる。

以上で、2014年７月のマドリッドへの出張報告を終える。